

中学生を対象とした SEL-8S プログラムの実践

学籍番号 209208

氏名 迫田知樹

主指導教員 水野治久

1. 背景

1 基本学校実習で見えてきた学校の様子

基本学校実習(2020年度)において、実習校は、問題行動が少なく、学力が高いとても落ち着いた学校であることがわかった。その一方で、授業や休み時間などを観察している場面において、生徒同士の他者への興味の希薄さ、相手のためを思う気持ちの低さが感じられる場面が課題として感じられた。実習校の教員にも同様の認識があり、中でも「主体性のなさ」が課題として重視された。これらの課題が表面化したと考えられる問題は長期欠席や別室登校の生徒が多数在籍していることであり、この傾向は発展学校実習時(2021年度)にも継続している。教室に入りにくい生徒の背後には、いじめ被害がある可能性も考えられる。学校におけるいじめの防止プログラムとして、松尾(2002)がまとめた内容の一つに、社会的スキル・トレーニング(以下、SST)がある。小林・渡辺(2017)では、集団 SST の実施によって、向社会的スキルと引込み事案行動の減少が見られたとしている。本研究では、SST を包含する感情学習型プログラムである社会性と情動の学習(以下、SEL)の中の一つのプログラムである SEL-8S プログラムを用いた。小泉・木村(2020)では、いじめ加害傾向やいじめを否定する認識が同プログラムによって高まる傾向が示されている。しかしこの認識の高まりは一定期間に止まり、継続はしないとも報告している。本研究では、中学生を対象に社会的能力の獲得に関する授業を行い、その後実施する、獲得した能力を活用できる取り組みを取り入れた通常授業によって、得た社会的能力を一次的ではなく継続的に維持できるということを、スキル得点の変化から量的に検討することが目的である。

2. 方法

2 実践手順について

小泉・山田(2011)より、「自己・他者への気付き、聞く」に関するプログラムを参考に介入を行った。介入は、実習校の中学校1年生のうち2クラスを対象にした。手順は、10月1週目に事前アンケート、2週目に SEL-8S プログラム、3週目に社会科授業と事後アンケートという形で実施した。介入の効果は、小泉・米山(2015)より、中学生版社会性と情動尺度Ⅱを用いて測定した。

3. 結果と考察

3 社会性と情動に関するスキル得点の変化の検討

プログラムの実施対象は、1年生2クラス分81名であった。そのうち不備や保護者の承諾を得られなかった等の生徒を除いた54名のデータを分析対象とした。社会性と情動尺度(小泉・米山, 2015)の下位尺度得点別に、対応のある t 検定によって事前(介入1週間前)、事後(介入1週間後)の得点を比較した。その結果、「人生の重要事項に対処する能力」で、事前の得点より事後の得点が有意に高い($t(53) = -3.18, p < .05$)ことが示された。

介入の実施とアンケート結果の分析から、本研究における SEL-8S プログラムと、実践で得たスキルを使うことができる取り組みを取り入れた通常授業を行う実践は、中学1年生の社会的能力の一部を向上させ、また介入一週間後まで維持させる上で一定の効果があることが示唆されたと考えることができる。「他者の話の聞き方」「話し手の気持ちの読み取り方」をスキルとして学ぶ中で、「自分の振る舞いが相手にこう見える」ということを同時に学び、トレーニングは「自分の意見／気持ちを表明する」「他者の話を聞き／様子を見て、気持ちを考える」といったようなスキルの獲得に繋がったことが示唆されたとと言えるのではないだろうか。本研究では、SEL-8S プログラムが長期的には継続しないという指摘(小泉・木村, 2020)に対して、プログラムで得たスキルを社会科の授業で使用するという試みを実施した。その結果、介入1週間後の効果測定でも、介入1週間前より一部で効果が認められた。今後、SEL-8S の介入を授業場面で実習するという方向性が検討されるべきであろう。

4. 課題

4 今後考えるべき課題

長期的な取り組みではないため、今後追跡調査を行った結果能力が失われ、継続しないことも考えられる。加えて、統制群を設定できなかったこと、介入の実施が研究者すなわち筆者自身によるものであることなどを考えると、たとえば10月中旬の体育祭に向けた学年練習などによって、生徒たちの能力が向上した可能性も指摘できる。今後の研究においては、実践効果をより明確にするため、統制群の設定、介入実施者を他の意図が介在しない教員に頼むなど、質的指標を充実させる方法の検討を課題としたい。

また、本研究で得られた介入実践の知識などを活かして現場に還元することや、学校実習で得た様々な学びを来年度の学校現場で活用していくことは、教員としての筆者自身の課題である。SEL-8S プログラムの実践や、社会科の授業実践以外にも、不登校支援や別室対応、学校行事の手伝いなど、様々な業務経験を得た。特に直近では、全学年の生徒が利用できる共通の別室対応教室が試験的に実習校に設置されたこともあり、その運営意義や今後の継続などについて実地での経験を積んでいる。今後はクラスワイドでのトレーニングのみならず、そういった個別での対応、諸問題の予防策といった取り組みも検討していきたい。